

過去最高、三四人の《島リーダー》が
徳之島に集結

本誌編集部

オンラインと会場研修の
ハイブリッド形式で開催

第三二期島づくり人材養成大学は、前年度に引き続き「島づくりのブレイキングマネージャーを目指して」をテーマに開講した。講師は、二〇〇七年より本研修に携わる西原弘さん（有限会社サステイナブル・デザイン代表取締役）が務めた。

今期は、全国一都道県二七市町村三四名の受講生が参加。二〇二四年八月二十九日（木）に事前オンライン研修として、参加者の顔合わせとグループワーク（Zoomのブレイクアウトルーム機能を活用）を実施。その後の一カ月は各グループの関係づくりのためのミー

ティングに加え、eラーニング教材を用いた事前オンライン学習に取り組み、一〇月一日（火）～四日（金）の鹿児島県徳之島での会場研修に臨んだ。

その後、一二月五日（木）と翌二五年二月六日（木）にオンラインによる事後研修を実施。会場研修後の受講生の取り組みをフォローアップした。本稿では、徳之島での会場研修の模様を紹介する（受講生は次頁表参照）。

自分の島で

まずは何をすべきかを追求

奄美群島に属し、徳之島町・伊仙町・天城町の三町からなる徳之島は、面積約二四八平方キロメートルと、全国で法指定離島で八番目の大きさを誇る。

鹿児島市と那覇市を結ぶ船が寄港するほか、鹿児島および奄美大島、沖永良部島との間に航空路がある。

サトウキビやジャガイモなどの農業、近海漁業、黒糖を原料とする菓子や焼酎製造が主産業で、長寿・子宝の島としても知られる。島内の生物多様性が評価され、二〇二一年に「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産に登録、観光客の増加も期待されている。

徳之島に集結した受講生たちは、目指す「島づくり」にあたっての自分の役割を「〇〇する大使」として定め、そのためにすべき具体的な行動「はじめの3歩」を考えるワークシヨップに取り組む。あらかじめ自分なりに「〇〇

第32期島づくり人材養成大学受講者(34人)

氏名	自治体名	島名
山田 果凛	山形県酒田市	飛島
小久保 彰紀	東京都新島村	新島
牧野 春美	〃	〃
福地 玲香	東京都神津島村	神津島
新澤 章子	新潟県粟島浦村	粟島
江龍田 崇大	新潟県佐渡市	佐渡島
竹久 友理子	三重県鳥羽市	菅島
早川 隆	島根県隠岐の島町	島後
加藤 彩菜	香川県小豆島町	小豆島
英 真介	愛媛県上島町	弓削島
高橋 伸一	愛媛県松山市	興居島
河端 勇磨	福岡県福岡市	玄界島
湖口 敏男	〃	小呂島
山本 泰久	長崎県壱岐市	壱岐島
田代 千博	長崎県新上五島町	中通島
赤木 りの	〃	〃
水野 孝史	長崎県五島市	奈留島
丹羽 夏海	〃	福江島
竹之内 幸	鹿児島県屋久島町	屋久島
行本 未沙希	鹿児島県喜界町	喜界島
実 雄飛	鹿児島県奄美市	奄美大島
野崎 久美	鹿児島県瀬戸内町	〃
三浦 里穂子	鹿児島県徳之島町	徳之島
西田 愛香	〃	〃
川村 祐貴	鹿児島県天城町	〃
市村 康	鹿児島県伊仙町	〃
大保 健司	〃	〃
猿田 瑞穂	鹿児島県和泊町	沖永良部島
池中 良子	鹿児島県知名町	〃
野口 美香	鹿児島県与論町	与論島
川畑 力	〃	〃
金城 哲	沖縄県座間味村	阿嘉島
玉木 大悟	沖縄県竹富町	竹富島
屋比久 貴登	沖縄県与那国町	与那国島

■おもな受講生の感想

- ・今まで漠然と持っていた「目標」「やりたいこと」をきちんと考え、文章化する。それをみんなの前で発表することは難しかったですが、自分の気持ちを再確認する事ができました(野口美香さん)
- ・研修を通して、自身の考えを具体化・言語化できたこと、島のことをしっかり話し合える仲間ができたことが、私の財産になりました(英 真介さん)
- ・仲間の真剣な眼差しを見ていると、とても心強く、一人ひとりがプレーイングマネージャーになる意欲を感じました(玉木大悟さん)

「大使」を考えて現地入りするが、会場研修での受講生同士の意見交換や講師からのアドバイス、時間をかけて自身の考えに向き合うことで、当初の「大使」が変わる人も少なくない。

特に自分の目標を、参加者間で共有し、それを達成するための課題や解決策を皆で考えていく過程で、各人の目標は受講生全員の共通認識となっていく。最終日には、受講生が一つのチー

ムのようになり、お互いの「島づくり像」を理解し、「〇〇する大使」の達成を支え合う関係性が構築されていた。

奄美群島ならではの 会場プログラム

今回の会場研修は、本研修開始以来初となる奄美群島での開催であったため、同群島からの受講生が一二名（三五パーセント）にのぼった。それまで奄美群島からの参加者は、決して多いとは言えなかったもので、従来とは大きく異なる受講者の構成となった。

事前に提示した研修テーマに惹かれ申し込みが増えたのか、受講人数も過去最高となり、その分だけ関心の所在が多様化することが想定された。そこで、今回の会場研修では、できるだけ多くの徳之島ならではの視察・体験機会を設け、参加者が自身の興味に応じて学びを深められるように設計した。具体的なプログラム内容、スケジュールは次頁表の通り。

■第32期島づくり人材養成大学を終えて

島づくり人材養成大学のプログラムは、十年一日同じではなく、私が担当する中でも大きな変革と、毎年のチューニングを重ねてきました。大きく括れば、次のような3つの時期に分けられます。

・2007～12年度(第16～21期)：「島づくり」に力点
「島づくり」に力点を置いた「めざせ！我が島プロデューサー」などの共通テーマを毎年設定し、これに関連する講義・グループワーク・都内事例視察を行いました。この時期はエコツーリズム専門家の海津ゆりえさん(文教大学教授)とのツイン講師体制でもありました。

・2013～19年度(第22～28期)：「人材養成」に力点
2013年度から一人講師体制となったこともあり、経営コンサルティングの手法を全面的に取り入れ、「人材養成」にフォーカスしたプログラムに再構築。テーマは「島づくり！はじめの3歩！」とし、受講者の属性や受講目的が多様であることに鑑み、受講者個々の目標設定・達成を相互支援するワークショップ形式としました。一人ひとりがオリジナルの「〇〇島〇〇大使」としての役割定義・目標設定・「はじめの3歩」をアウトプットする「型」を確立。2016年度(第25期)からは現地開催に変わり、より「合宿感」が増し、相互支援による成長・成果のレベルアップが見られるようになりました。

・2021～24年度(第29～32期)：人材の「影響力」に力点

2020年度はコロナ禍で中止となり、2021年度(第29期)に再開するにあたり、島づくり人材養成大学受講の波及効果をより大きなものとすべく、「はじめの3歩」のプログラムを継続しつつ、「島づくりのプレーイングマネージャーを目指して」をテーマとし、事前・事後オンライン研修とeラーニングを導入しました。受講生のスキルアップと、目標達成に向けた行動の継続力、周囲へ及ぼす影響力が向上したように思います。

そして今回は「島づくりのプレーイングマネージャーを目指して」のテーマで4年目、①ファシリテーションスキルの習得(eラーニング)、②人間関係の構築・維持(事前・事後オンライン研修+会場研修)、③自分の役割定義(〇〇島〇〇大使)・目標設定・目標達成行動具体化(はじめの3歩)のスキル習得をねらったプログラムを実施しました。

過去最多の34名が受講し、徳之島の人と土地の暖かさにも包まれ、例年にもまして活気あふれる会場研修4日間でした。プログラム外の「夜間自主訓練」も志願者多数で盛況だったようです。

会場研修の4日間という日数は、1年の1%、人生の0.01%に過ぎません。しかし、そこで出会い育んだ仲間との縁を大切に《世のため・人のため・自分のため》を胸にそれぞれの目指す道を進んでいってほしいと思います。やがて人生を振り返った時に、特別な4日間として思い出されることを願います。

(西原 弘・第32期島づくり人材養成大学講師)

第32期島づくり人材養成大学プログラム内容・スケジュール

事前研修		
8月29日(木)	事前オンライン研修・ガイダンス、自己紹介、グループワーク	
8～9月	・オンライン学習(Learning Management Systemによる自主学習) ・グループ別ミーティング	
会場研修(鹿児島県徳之島)		
	午前	午後
10月1日(火)	各地から空路・海路で徳之島へ	☆開講式、ガイダンス ☆ワークショップ① ・島大使としての目標設定・発表 ★徳之島町での交流会：奄美独自の伝統文化・芸能、おもてなし文化に触れる。
10月2日(水)	★徳之島町体験 ・金見地区まちあるき：徳之島の自然文化に触れるエコツアー。地域組織「金見あまちゃんクラブ」(元田浩三代表)の活動(ガイド、食堂経営など)を学ぶ。	☆ワークショップ② ・ダメ出し・ダメ返しワーク ★徳之島町視察 ・花徳地区の観光闘牛：島に根ざした文化や住民の思いに触れるとともに、地域の担い手育成について考える。 ・道の駅とくノしま視察：道の駅建設予定地(2024年12月開館)にて「一般社団法人徳之島社中」(芝田竜星代表)の活動を学び、食堂で島の食材を使った料理を試食する。 ・アミノクロウサギツアー(希望者のみ)：エコツアー。世界自然遺産地域に関する理解とその保全などに関する取り組みを学ぶ。
10月3日(木)	★伊仙町視察 ・意見交換会：「私の徳之島ははじめの三歩」をテーマに、松岡由紀さん(伊仙町教育委員会町誌編集室長)、古林香奈代さん(徳之島ゲストハウスみち代表)、大保健司さん(とくのしま伊仙まちづくり協同組合事務局長)の3人から担い手育成、Uターン、仕事づくりなどをテーマに実践報告を聞き、意見交換を行なう。 ・直売所・昼食：「百菜」(盛田一成店長)から特産品開発・販売の話を伺い、住民組織「ばあば市場」が提供する昼食をいただく。 ・徳之島コーヒー試飲：犬田布岬にある喫茶コーヒースマイル(吉玉道子店主)のコーヒーをいただき、産業振興・特産品開発についての話を伺う。 ・犬田布岬訪問	☆ワークショップ③ ・目標見直し ・はじめの3歩ワーク ★天城町での交流会：ジビエ(おもにイノシシ)を含む島産食材を使ったBBQ形式の交流会。島でお世話になった関係者の方々などと、日中のプログラムで話しきれなかった内容について深く語り合う。
10月4日(金)	☆島大使発表 ☆講評・解散式	徳之島から空路・海路で各地へ
事後研修		
12月5日(木)	事後オンライン研修① ・実践報告、セルフマネジメントのヒント ・人材育成基金助成事業の案内	
2月6日(木)	事後オンライン研修② ・実践報告、セルフマネジメントのヒント	

今回はテーマを新たに、 佐渡島で開催

本研修は、二〇一六年の第二五期に会場研修を東京から離島開催として以来、長崎県杵岐市、三重県鳥羽市、鹿児島県屋久島町、広島県大崎上島町、島根県西ノ島町、愛媛県上島町と、各自治体をはじめ関係者の皆さまに協力いただきながら、各島の特徴を生かした魅力のあるプログラムを実施してきた。今回は、初めて自治体をまたいだ開催となり、徳之島三町、一般社団法人徳之島観光連盟、鹿児島県離島振興協議会などの皆さまの多大なお力添えで、非常に充実した会場研修が実現した。高岡秀規徳之島町長、大久保明伊仙町長、森田弘光天城町長におかれては、忙しい公務の合間をぬって各プログラムにご参画いただき、受講生たちとの交流を図っていただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

第三三期は、テーマやプログラムを新たに、開催する予定である。ぜひご参加いただきたい。なお、会場研

修は新潟県佐渡市で行ないたいと考えている。
(佐伯)



第32期受講生の集合写真。



2日目の「金見地区まちあるき」の様子。

■人材養成大学の受講とその後の活動

新潟県佐渡島から高速船と飛行機を乗り継ぎ、鹿児島新港からフェリーに揺られ、初めての徳之島へ。10月の肌寒い佐渡島とは対照的な、半袖で過ごせるほど暖かく南国情緒あふれる島に、はやくも魅了された。

ワークショップでは、年齢も職業も異なる班のメンバーだったが、事前のオンライン研修や「島に住んでいる」という共通意識もあり、建設的な意見交換が行なわれ、自らの考えをブラッシュアップすることができた。また、移動中や食事の際には、他の班の参加者とも積極的に交流し、島での取り組みや先進的な事例について情報交換をすることができ、大いに刺激を受けた。

滞在中は、徳之島の方々の温かいおもてなしに感動の連続だった。初日の夜には島の民謡で歓迎を受け、各所では島の食材をふんだんに使ったおいしい料理を堪能した。私自身も、佐渡を訪れる方々へのおもてなしの気持ちを改めて見直す、たいへん良い機会になった。

研修後、熱が冷めないうちに徳之島での経験を佐渡の知人に伝えたいと考え、報告会を企画した。同じ集落の同年代や、地域おこし協力隊時代の同僚も交えて総勢10名が集まり、島の黒糖焼酎を酌み交わしながら、スライドを用いて報告

を行なった。その中で、徳之島の合計特殊出生率が全国の中でもかなり高いこと、さらに徒歩圏内に小学校があるようにしているという話題が参加者の関心を集めた。また「闘牛」が島に住み続けたい理由になっている話を紹介すると、佐渡島の「鬼太鼓」のように伝統芸能が郷土愛を育む要素の一つになっているのでは、という意見も挙がった。徳之島と佐渡島の共通点を考察するなど、報告会を通じて研修の経験をより深く掘り下げることができたので、企画して良かったと感じている。

現在は、研修の最終日に宣言した「佐渡の偉人を再発見する」大使の目標に向け、フィールドワーク・記事の執筆に取り組んでいる。地域の歴史を探求する公民館講座にも毎週参加し、島の先輩方と学びを深め合っているので、研修での学び、そして佐渡での経験を今後の島づくりに活かしていきたい。

最後に、今回受け入れをしていただいた徳之島町、伊仙町、天城町のみなさま、講師の西原 弘さん、そしてともに学んだ全国の島々に住む仲間たちに心から感謝申し上げます。これからも互いに切磋琢磨し、より良い島づくりを目指してがんばりましょう！

えりゆうでん
(江龍田崇大・新潟県佐渡市)